

「関係の文化」から捉え直す アジアの家族主義

家族社会学・比較社会学研究の視点から

落合 恵美子 京都大学

私もこの『東南アジアにおけるケアの潜在力』をたいへん興味深く読みました。今日は最初にもっとも大事なことをお話ししようと思ったのですが、それは青山先生が最後におっしゃったことなんです。これは一般の方が読んでもすごくおもしろいし、いろいろと得ることがある本ですから、もう少し薄くして価格も下げて、エッセイのように一般の方に届く語り口にして、ぜひもう1冊出版していただきたいと思いました。(笑) いま日本でケアをされている人が読むと、さまざまなヒントが得られる本だと思います。どうぞよろしくをお願いします。

COEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」と Intellectual Heritage Project

東南アジア研究所では2007年から2012年にかけてグローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」を実施されていますが、私たち京都大学文学研究科ではその少しあとにグローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」を始めました。そこでも「ケア」がキーワードで、速水先生たちのグループと並行して、ときどき交流しながら研究をしてきました。

私たちのCOEプログラムでは、アジアにおける人文社会科学の共同研究の基盤形成をミッションとして掲げました。すでに共同研究は *ad hoc* にいろいろ始まっていましたが、そのベースになるものが必要だと考えたのです。まずはそれぞれの社会で研究し、考えて蓄積してきた文献や知識—— Intellectual Heritageを共有する。そしてそれらの情報共有を前提にして、同じ質問用紙を使うなどして、比較可能なサーベイをアジア社会で実施する必要があると考えて取り組みました。

社会について数量分析をする際には、たとえばヨーロッパであればユーロスタット (Eurostat) というものがあって、簡単にできるわけです。これは一国を分析するためにも重要です。自分が研究している国はヨーロッパ全体のなかでどのような位置にあるのかを最初のセクションで述べて、それから本論に入るのが研究論文の定番のかたちになっています。

しかし、アジアにはアジアスタットがありません。日本学術会議で「アジア学術共同体の基盤形成をめざして」という提言を発出して「アジアスタットの実現」を要望したのですが (<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t135-3.pdf>)、担当省庁は聞く耳は持ってくれませんでした。国際的調整が大変だと思われたのでしょうか。統計を操作されてしまうかもしれないので、ないほうがいいかもしれませんが。(笑) そこで、自分たちでできることをしようということで、East Asian Social Survey(EASS) という東アジアの4社会で行ったサーベイと似たかたちで、東南アジアとインドとカタルとトルコについて調査をしました。こうした共通の基盤があれば、共同研究がうまくいくのではないかと考えたわけです。

このIntellectual Heritage Projectは、‘Asian Families and Intimacies’ という3巻か4巻のセットを出すことから始めることになりました。アジアでは、よくも悪くもやはり「家族」がキーワードにされますので、それについて各国のそれぞれの言語で出版・発表された重要な研究の収集・翻訳・共有をしようとしたわけです。まず英語で、Sage Indiaから2020年か2021年に刊行予定です。

この国際編集委員会のメンバーは表に示したとおりです。東南アジア、インドと東アジアをカバーするようなグループになっています。このグループで、表2に示した六つのパートに分かれた3巻本を作っています。インドや韓国、フィリピン、タイなどさまざまな国の研究者が、その社会において読むべきと評価されている論文を選びました。

表1 ‘Asian Families and Intimacies’
編集委員会

Chief Editors
Thanes WONGYANNAVA (Thammasat University, Thailand)
EUN Kisoo (Seoul National University, South Korea)
Patricia UBEROI (formerly, Institute of Economic Growth, Delhi, India)
NGUYEN Huu Minh (Vietnamese Academy of Social Sciences)
OCHIAI Emiko (Kyoto University, Japan)
Carolyn SOBRITCHEA (University of The Philippines)
Associate Editors
YI Chinchun (Academia Sinica, Taiwan)
HOU Yangfang (Fudan University, China)
XU Anqi (Academy of Social Sciences, China)
Gadis ARIVIA (University of Indonesia→Montgomery College)
NAKATANI Ayami (Okayama University, Japan)
NAGASAKA Itaru (Hiroshima University, Japan)
MORIMOTO Kazuhiko (Kyoto University, Japan)

表2 ‘Asian Families and Intimacies’ 6部構成

Part 1 Ideology	8章
Part 2 Patriarchy	10章
Part 3 Sexuality	10章
Part 4 Marriage	8章
Part 5 Care	10章
Part 6 Gender	9章

「家族主義」だけでは語れないアジアの実態

—— ‘Asian Families and Intimacies’ の成果との呼応

私はこのシリーズのなかで「Care」のパートを担当して、その序文をこういう内容から書き始めました。「老人、病人、障がい者、子どもたちのケア・ニーズは、伝統的には家族のなかで果たされてきた。家族のなかでは主に女性の家族員がケアを提供してきた。アジアにおいてはとくにそうだ」といった文章で始まる論文や本を、よくみたことがあるのでは

ないかと思えます。告白すると、私も書いたことがあります。しかし、各国の研究を集めてみたところ、ここから出発するのが間違いの元ではないかと考えるようになりました。そもそも Familial Care といっても、みているものが各社会で違うのではないかと。Asian familialism とよく言われて、私も批判してきたのですが、それ自体を再考しなければいけないということから、その序文を始めました。

Lan Pei-Chia(ラン・ペイチャ) という台湾大学の社会学者がいます。Global Cinderellas: Migrant Domesticity and Newly Rich Employers in Taiwan という本を書いている人です。彼女は、現在のケアワークについての研究は、西洋的・家族的な親密性という文化的な概念に乗ったものだと言っています。キャロル・ギリガンの仕事にも、そういう点があると私は思っています。「ケアは理念としては天国に上って、実践としては地に落ちた」と言われます。そこまで天に上げなくてもいい日常のことだと思のですが、なぜか天に上がってしまう。それは Familial Intimacy を重視しすぎる西洋文化の偏りが、こうした研究に反映しているからだと思っています。現在の世界の主流の研究は、西洋近代的なケアの概念を人類社会の過去にも現在にも投影したものです。私自身は、ケアを持ち上げるような語り方はしたくないし、しないようにしてきました。

つまり、「ケアワークというのはプライベートで、女性がするものである」という考えは、歴史的にはヨーロッパの近代で始まったことなのではないか。現在さまざまな分野で「ケアの脱家族化」が研究されていますが、そもそもその前に「ケアが家族化した」ことが重要です。こうした指摘をすることから近代西洋的なケアの概念を見直していこうという序文を、The 'Asian Families and Intimacies' series の Care のパートで書きました。

この Care のパートで集めた論文のなかから、アジアの歴史においてどのようなケアがみられるかについて紹介します。

『東南アジアにおけるケアの潜在力』のなかで、ケア・ダイヤモンドについて引用をいただいている方もおられました。この概念は私が考えたものではありません。G. エスピン＝アンデルセンなどがよく使うケア・トライアングルに「コミュニティ」などのもう一つのセクターを加えたこの概念は、UN のプロジェクトでよく使われます。シャーラ・ラザビがリーダーを務めてわたしたちも参加したプロジェクトでも使いましたが(『海外社会保障研究』170号参照)、つまり国家と家族と市場だけでは、UN が主な対象としているような

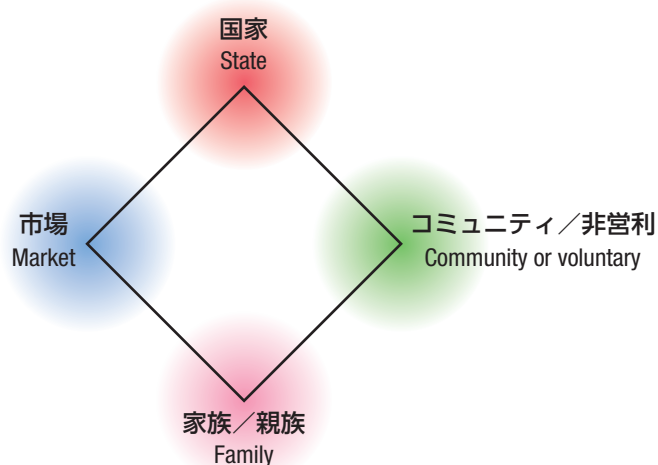


図1 ケア・ダイヤモンド

多くのアジアの社会やアフリカの社会や南米などでは使えない。そこでもう一つ足したものです。ですから、追加されたセクターは概念的には曖昧なもので、コミュニティもあればボランティア・アソシエーションなども入っている。とにかく国家と市場と家族では覆えないものが大切で、それを入れることでけっこう動的な枠組みになるのではないかという考え方です。

家族主義という考え方に基づく「家族」のところばかりが大きいと思われがちですが、じつはアジアの歴史をみてもドメスティック・ワーカーを普通に雇用していますし、コミュニティもいろいろ活躍していますし、地方政府が福祉政策のようなことをしていることもあります。日本は東北の藩がけっこうしていました。中国でもチャリティなどがありますね。こうしたものを入れると、アジアの過去も家族だけではなかったと考えられます。

アジアの現在についてはどうかというと、これももちろん、それぞれのセクターがさまざまな役割を果たしています。ですから、「アジアの家族主義」とか「女性だけがしてきた」とかいう議論から出発するのはやめたほうがいいでしょう。

いま申し上げたようなことが、この『東南アジアにおけるケアの潜在力』のなかには散りばめられていて、当然だという感じで書かれていました。私たちのプロジェクトで考えてきたことと呼応していて、心強く思いました。

「アジアの男は家事やケアをしない」と言い切れるのか ——アジア家族比較調査との齟齬

すでに申しましたように、グローバルCOEでは、アジア各国における社会学の主要業績の共有を第一層とし、国際比較研究のためのデータベース構築を第二層として掲げ、そのうえでテーマ別の国際共同研究を実施する計画を進めてきました。その成果の一つとして、「アジア家族比較調査 (Comparative Asian Family Survey (CAFS))」を実施して、それを用いた研究の第一弾は*Care Relations in Southeast Asia*として出版しています。これは数量的な分析です。うまくいっているかどうかわかりませんが、こういうものもありますので、ご覧いただけたらと思います。

この本を作るときに、東南アジアの方たちは「東南アジアはPatriarchalだ」ということから出発するわけです。一方で東南アジアのことを勉強している人は、「いや、双系制だ」と思って、抵抗感があるんです。でも、生きている現実としては、とくに女の人たちはPatriarchalな感じがしているんですね。そのあたりをどのように表現してまとめたいのか、速水先生にも参加していただいて編集会議をしました。

このCAFSプロジェクトの成果からみると、『東南アジアにおけるケアの潜在力』のなかにある「東南アジアでもケアは女性がやっている」という部分には異論があります。掃除や夕食の支度をどのくらいしているかについて、東アジアと東南アジア、インド、トルコを入れて比較してみました。ベトナムのカントーとハノイ、タイのバンコク、マレーシアのクアラルンプール等、インドのデリー、チェンナイ、ロータック、トルコのアンカラ、そして東アジアの台湾、韓国、中国、日本です。

これをみると、女性のほうがケアを多くしているのはどこでも同じです。しかしその差は異なります。タイやカントーの男性は、日本などと比べると割とケアをしています。で

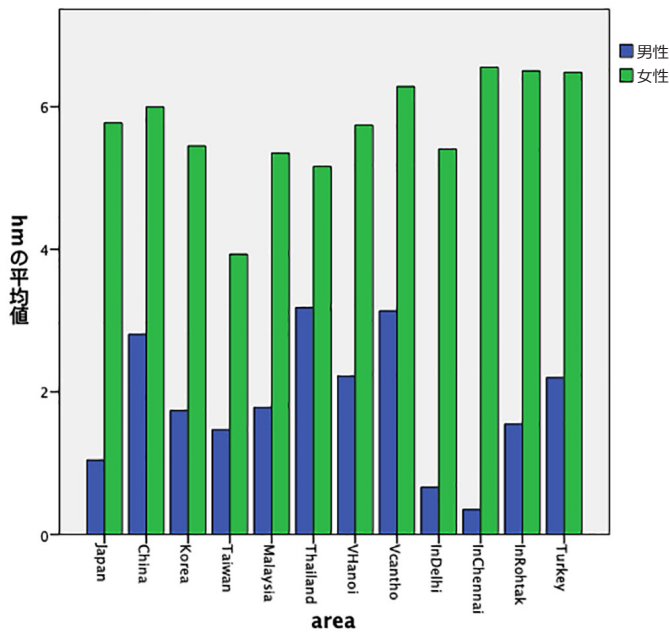


図2 夕食の用意をする頻度(男女別)

資料:CAFSおよびEASS2006より作成

出所: 落合恵美子・郭雲蔚「ジェンダー意識と家事分担の地域間比較」CAFS科研「高齢化するアジア諸社会における世代・ジェンダー関係の多様性と変容」第2回研究会(2020年2月28日)より

すから、一緒くたに「男は家事やケアをしない」と言ってしまうと、タイやカントーの男性に失礼なんじゃないかと感じます。ハノイもそこそこ、東アジアでは中国もけっこうしていますね。夕食の支度を見ていただいても、やはりタイ、カントーが高く出ています。マレーシアは低めです。

東アジアをひとまとめにすることもできませんし、東南アジアをまとめることもどうかと思いますが、数量分析の結果をみると、けっこう東南アジアの男の人は家事をやっているのかもしれない。ですから、そのあたりの書き方は繊細なほうがいいのではないかなと思いました。「日本と同じくらいやっていない」と誤解される書き方にならないほうがよいと思います。

関係の文化と家族主義は連続するのか対立するのか —— 無償の愛の西洋と互酬性のアジア

『東南アジアにおけるケアの潜在力』においてもっとも重要なコンセプトは、「関係の文化」だと思われます。私はアジアの家族主義というものについてこだわって考えていますが、関係の文化と家族主義は対立するのでしょうか。それとも連続しているのでしょうか。関係の文化というものが何と対立するかというと、個人主義と対立するだろうと思いますね。それから、やはり概念的には家族主義とも対立するのではないかと思います。二者関係の集積であるという概念と、集団をガチッと決めてしまうこととは、ずいぶん異なることです。そうすると家族主義と関係の文化とは違うのだろうか。類型はあるのか。東アジアが家族主義で、東南アジアは関係の文化なののでしょうか。インドはどうでしょうか。ベトナムはどうでしょうか。気になってきます。

こんな割り切りはナンセンスだと思って聞いていらっしやるとは思います、人間の理解

というのは単純なものですから、単純化しないといけないところもあります。東南アジアのなかで、関係の文化的にケアをする地域と家族主義的な地域と、地図が描けるのでしょうか。シンガポールなどでは家族主義という言葉が出てきていますが、ただしそれは政策として使っているわけです。そのあたりについて、「単純に地図化なんかできない」とおっしゃるのであればそれでけっこうですが、うかがってみたいと思いました。

しかし、そんなことを考える際にも、家族主義そのものが多様だということは踏まえておかないとならないと思います。インドでも韓国でも、アジアの家族主義というのは互酬性に基づいていますよね。しかし、ヨーロッパやアメリカの家族的なケアというのは、無償の愛、一方的なものということになっているのではないのでしょうか。何をしてくれたから家族をケアするというのは、ヨーロッパ的な文脈でみたら、どこか汚いことだと思いませんか。しかし、アジアの人は普通にそう言います。ですから東西の家族主義は違うものではないのでしょうか。無償の愛に基づくケアというのは、近代ヨーロッパ的な、近代家族的な、偏りを持ったコンセプトなのだろうと思います。それに対して、同じ家族主義という言葉を使ってもアジアは違うということ言うのに、互酬性という言葉が一つ使えるでしょう。これは本のなかでも何度も出てきました。

あとは、多様性の点で言うと、もっと違う分け方もできると思いました。半同居とか、同居してはしていないけれど近隣に住むなど、さまざまなことが出てきました。そういうところまで家族主義に入れていくと「関係の文化」と連続するのかもしれない、このあたりをどのように概念化していらっしゃるかをうかがいたいと思っております。

宗教と社会的公共圏、ケア概念の拡張 ——本書から得た学びと可能性

『東南アジアにおけるケアの潜在力』では、『ケア・ダイヤモンド』論を越えて」と書いておられる方もいました。私も2019年の4月に、ケア・ダイヤモンド図式の根拠は何かについて考えて、ハーバーマスの読み直しをして論文を書きました¹。ハーバーマスというのは、四つの圏が歴史的に成立してくることをきちんと書いています。政治的公共圏、経済的公共圏、社会的(市民的)公共圏と分離されるものとして親密圏が出てくるということ、よく読むと書いてあります。ハーバーマス読みの人たちが言う『市場に公共性を求めている』、『国家は公共的ではない』とハーバーマスが述べている」というのは、あとで書いたことのなかではともかく、『公共性の構造転換』の段階ではそんなことはない。こういう根拠があるということをつけ加えておきたいのです。

コミュニティや宗教は、三つ目の公共圏、社会的公共圏に入るのではないのでしょうか。ヨーロッパでも、宗教から出たチャリティというものが、政治的公共圏で福祉国家に育っていったわけですね。そのあたりを考えると、宗教について書かれた章はすごく魅力的なものが多かったと思いますが、それは東南アジアだけのことではなく、もっと一般性を持つものとして書けるだろうなと思いました。

もう一つ本書から学んだこととして、ケア概念の拡張が挙げられます。「再生産だけではない」と速水先生が書いておられて、私も、なんといいか考えて「人が生きることを支える活動」などと書いたりしていますが、さらに広い概念が示されていました。「ひ

▶1 落合(2019)。

とりにしてはいけない]、「儀礼をケアとして用いている」、「死に参加する」、「死者に対するケア」というものもありましたね。「死者をケアするために独りで住まなければいけない」という話があって、本当にこの概念は広いなと感じました。そこで小さい質問ですが、「ひとりにしてはいけない」という場合、SNSでつながっている状態はひとりではないことになるのでしょうか。隣に体がいないといけないのでしょうか。聞いてみたいと思います。

東南アジアと世界のケアの行方 ——圧縮した近代とヨーロッパのアジア化

最後に、これからこの東南アジアの、あるいは世界のケアはどうなっていくかについてうかがいたいです。「関係の文化」というのはサステイナブルなのでしょうか。日本でも、けっこう「関係の文化」はあったと思います。しかし、ここまで廃れました。では、東南アジアも廃れるのでしょうか。また、すでに福祉国家の福祉制度が育ってきています。それが結合していますよね。こうしたミックスのようなかたちになっていくのかなと読んでいて思いました。

サステイナブルかどうかを考えると、人口学的な変化が私は気になります。よく日本については「きょうだいの数が減ったから」ということを言っています。しかし近所の人との関係でもいいとすると、人口学的な変化だけでは私的なケアネットワークは「これからはなくなりますよ」とは言えないかもしれない。「これからどうなるんですか」ということをうかがいたいです。圧縮した近代では、日本みたいにケアが家族化して、家族外の人たちはそこから引いていってしまうということが起こらないのだろうか、別の道になるのだろうかというあたりを教えてくださいたいと思います。

これは圧縮した近代だけの問題ではなく、「アジア化するヨーロッパ」というようなことが、いま問題として立てられると思うんですね。あまり人は言っていません。でも、私がこのリサーチ・プロジェクトで応募したらフランスで採用してくれて、1年間向こうにいられました。よほど怖いのだと思います。(笑) 福祉削減などによって、ヨーロッパの現在のケアの状況はアジアに似てきているのかという問題を立てたのです。結局、答えはNOでした。やはり少し違います。でも、福祉国家をいままでどおり維持できなくなっていくヨーロッパにとっては、どのようなミックスがうまくいくのかに関連して、東南アジアがヒントを提供してくれるかもしれません。その意味で、この展望もぜひうかがってみたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

引用・参考文献

落合恵美子 (2019) 「親密圏と公共圏の構造転換——ハーバーマスをこえて」『思想』2019年4月号(1140)。

Ochiai, Emiko et al. eds. Forthcoming. *Asian Families and Intimacies*. Sage.

Patcharawalai Wongboonsin et al. eds. 2018. *Care Relations in Southeast Asia*. Brill.